

真のごちゃまぜプロジェクト 知ることからはじめよう

認定 NPO 法人 アークシップ

〒231-0014 神奈川県横浜市中区常盤町 1-1 宮下ビル 4F

助成事業の概要

【目的】体験と学習から知識を体得しユニバーサルなイベントを具現化する。

【区分 A】研修会（体験会）の開催

1. 研修会 1 回目：VR（バーチャルリアリティ）体験会

6/18（土）会場：波止場会館 5 階ホール VR を用いて障がい当事者の立場を体感。講師：黒田麻由子氏（株式会社シルバーウッド）

2. 研修会 2 回目：ユニバーサルガイドボランティア研修会

8/20（土）会場：波止場会館 5 階ホール イベント会場で障がいがある方を介助する具体的な対処方法を体験学習。講師：NPO 法人移動サービス、中消防署、くどおかステーション

3. 研修会 3 回目：ユニバーサルデザインの基礎～色と形そして文字～【オンライン講座】

9/14（水）多様な見え方があることを知り、情報伝達に活かす方法を学習した。講師：間嶋沙知氏（デザイナー、高知県在住）

【区分 B】上記の活動で得た知見をイベント運営に活用・共有ならびに情報の発信

1. 「ユニバーサルイベントの手引き書」の作成とイベント運営での活用

2. 参加者募集やレポート発表に用いるプロジェクト専用のホームページ構築

事業の成果

1. VR（バーチャルリアリティ）体験：有料参

加者 20 名（配信受講含む、ゴーグル型 VR のため配信参加者は見学のみ）

体験後のアンケートで約 70%の参加者が体験内容に「大変満足」であり当事者への理解を「感じた」との感想を得ることが出来た。健常者と障がい者の境目は無く濃淡（グラデーション）があるとの講師の解説に共感していた。また個々の VR 体験から私たちがイベントの運営をする上で何が出来るかを協議し音楽祭会場にて実践した。

1) 聴覚感覚過敏（周りの音を聞こえすぎてしまう）

サイレントルーム（休憩室）の設置。イヤーマフ（遮音器具）の貸出。意識的なゆっくり会話。

2) 不注意優勢型の ADHD（優先順位をつけられず混乱する）

仲間同士、スタッフ間においての配慮。一度に複数の業務指示は極力避ける。

3) 視野障害（視界狭小と中央が見えない症状）

口頭での案内内容の配慮。「こっち」「あっち」などの「こ・そ・あ・ど」言葉を使わない。

2. ガイドボランティア研修会：有料参加者 25 名。

ホール内に障害物を設置しての車イスの介助の体験研修は、障がい当事者の参加もあり、生の声を得てマニュアル化に役立った。例えば介助する時の声のかけ方の台詞化。また段差や坂道を上がる時と降りる時の補助操作の違いを体得出来た。同時に実施した A E D 講習では、参加者全員が専門の消防職員と消防団員から丁寧な指導を受け器具操作を体得することが出来た。

3. ユニバーサルデザインの基礎【オンライン講座】：有料参加者 79 名

VR体験会で得た知見を補完する視覚的なユニバーサルデザインの理論と実践を学んだ。

たとえばカラーユニバーサルデザインの分野では、目の仕組みからはじまり、高齢者や障がい者を含めた色覚多様性を知り、良い色合いとは伝わる目的が達成できる配色であり、色味をずらす、コントラストを強める、色以外の情報（形やサイズ）を加える手法があることを学習出来た。

具体的な成果はイベント会場の掲示物を例に、コントラストの付け方、文字の視覚的明瞭化やレイアウトの規則性をマニュアル化した手引書を作成した。

成果の広報・公表

6/18 実施「～VR 体験会～」と 8/20 実施「ガイドボランティア研修会」は本助成金で構築した専用ホームページで以下のスケジュールで公表した。

9/14 実施のユニバーサルデザインの基礎【オンライン講座】は開催同日にホームページからリンクする方法で YouTube にて講座全編の動画を公表し 400 以上の観覧者からチャンネル登録をいただいた。

<https://www.youtube.com/watch?v=BieEc0YzoyU>

「カッコいい大人への道～手引書～」と改題した「ユニバーサルイベント手引書」は同じく専用ホームページにて公表した。また「カッコいい大人への道～手引書～」はユニバーサルなイベントを初体験するスタッフでも分かりやすくするために、文字数を少なくしイラストも多用し、知恵を絞った成果物であり、昨年横浜で開催された音楽イベントに従事した日本財団ボランティアのべ 80 名に配布して活用していただいた。さらに今年 3 月 19 日に横浜市内で開催されたパラスポーツイベント「ちょうどいい運動会（FM ヨコ

ハマ主催）」においても従事するスタッフ約 50 名全員に配布した。

今後の展開

私たちは福祉の専門家ではないが、心身に障がいがあっても「行ける」音楽祭を目指し、一步一步努力と実行を積み重ねてきた。その過程で感じることは知ることの大切さである。「知る」とは専門家が持つ知恵や技術に加え、障がい当事者と直に接し相手の立場を知ることでもある。今回の助成事業を通じて多くの事を知り、どのように音楽祭の運営に役立つかを協議し「手引書」として体系化する事が出来た。

私たちアークシップには、視覚障がい者 2 名、構音障がい・歩行障がい者 2 名の仲間達、そして出演者の中にも多くの障がい者がいる。今後の展開で特に注力したい点は、この活動を多くの障がい当事者に伝え、多様な仲間を増やしたいと考える。多様な仲間達とともに「障害者向けの音楽祭」ではなく、「一緒に楽しむ音楽祭」を創りたい。配慮は必要だが過度に構えることなく、ともにひとつの夢へと歩みたい。なぜならその夢への過程が相互理解と社会を変えるきっかけになると考えるからだ。